

平成 23 年 4 月 12 日現在

機関番号：32404  
研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2008 ～2010 年度  
課題番号：20520476  
研究課題名（和文）多言語社会の日本語教育に関する社会言語学的総合研究

研究課題名（英文）General Research of Sociolinguistics Regarding Japanese Language Teaching in a Multilingual Society

研究代表者  
山下 暁美（YAMASHITA AKEMI）  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：10245029

研究成果の概要（和文）：日本語母語話者側と日本在住の外国人側の両面から、文化・社会・心理的な要素を考慮に入れて、共生時代の日本語教育の再検討のための基礎的研究を行なった。

国内の多言語状況から、日本語教育における文化、社会、心理的要因の分析に着目した多面的研究が必要とされている。各研究領域で単発的に行われている研究を、本研究では、社会言語学という一定の統一的理論に立って、日本語教育の現状、問題点について、分析、考察を行った。

具体的な成果として、日本語学習者の情的コミュニケーションの考察、多言語社会のコミュニケーション摩擦について「曖昧性」を課題とした研究、日本人大学生の理解力の研究、日本語とポルトガル語の言語接触、日本語景観の歴史的分析による言語接触、多言語化の研究などをあげることができる。研究成果は、多岐にわたった。

研究成果の概要（英文）：

Communication is divided into intellectual communications and emotional communications. Non-native Japanese learners often have more problems adjusting to personal distances than with actual Japanese expressions.

Based on our analyses, it is important to include these crucial aspects of communication when attempting to educate non-native Japanese learners about the Japanese language. It is necessary to express sympathy and unity while speaking Japanese, and therefore, it is vital to include these considerations in a Japanese language learning curriculum. The attributes of higher involvement, and the elimination of higher consideration should be learned.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	¥1,100,000	¥330,000	¥1,430,000
2009 年度	¥1,100,000	¥330,000	¥1,430,000
2010 年度	¥1,100,000	¥330,000	¥1,430,000
年度			
年度			
総計	¥3,300,000	¥990,000	¥4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：多言語社会、日本語教育、社会言語学、変異、地域社会

#### 1. 研究開始当初の背景

国内の多言語状況を見ると、日本語教育における文化、社会、心理的要因の分析に着目

した多面的研究が必要とされている。各研究領域で単発的に行われている研究を、社会言語学という一定の統一的理論に立って、日本

語教育の現状、問題点を分析、考察を行う必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究は、多言語社会の日本語教育の必要性について、社会言語学的な視点を取り入れた総合研究を行う。「変異」、「談話分析によるコミュニケーション行動」、「地域社会の外国人と言語問題」、「グローバル化の中の日本語教育政策」等を主な研究目的とする。

日本の地域社会、とりわけ都市社会においてはニューカマーと呼ばれる在日外国人が、その量と質の両面で増加・多様化の方向にある。日本語がコミュニケーションの主な手段となっている「日本語社会」においては、当然のことながら、日本人と外国人とのコミュニケーション問題が生じ、さまざまな軋轢を生んでいる。その中で、もっとも普遍的で深い問題が言語表現や言語行動上の「曖昧さ」だと思われる。在日外国人がほぼ一様に慨嘆する日本人の言語表現にみられる曖昧さとは何なのか。外国人留学生へのアンケート調査の結果を出発点として、彼らの困惑をもたらしている要因を考えてみたい。

言語景観は経済言語学の分野での実証的・実践的資料と位置付けうる。ここでは、日本の言語景観 (linguistic landscape) を分析する。言語景観の可視的データを使用することによって、言語使用状態を確認したい。言語景観研究の目標は、多くの実例のバリエーションを集めて、法則性を見出すことである。また言語景観形成のメカニズムと背景を、歴史的な変遷に基づいて追求する。地域的変異、時代的変異を考察する。「地理は時間を反映する」という立場から、通時的な研究から理論を求めらる。

日本人大学生については、以前から学力低下問題が取り上げられ、ゆとり教育に対する賛否などと合わせて考察の対象になってきた。この問題は教育制度に負うところも確かにあるだろうが、その一方で、若い世代だけでなく、日本人全体に関わるものという問題意識も必要ではないかと思われる。例えば 2010 年 1 月 30 日(土)放送のNHKの番組「追跡! A to Z」では、自分の考えを相手にわかりやすく伝えることの難しさは若い世代に限ったことではないとしている。ここで問われているのは狭い意味での語学力の問題ではない。

こういった背景のもとに、外国人留学生とともに学ぶ日本人大学生の能力実態の一端を示すことにする。

## 3. 研究の方法

(1) 在日外国人の談話を日本人とインフォーマントと国籍の異なる在日外国人に聞いてもらい、印象を 5 段階評価してもらおう。そして、談話分析の結果と印象との関係を明らかにする。

にする。

(2) 会話スタイルに関するアンケート調査を実施した。これにより、外国人留学生が日常生活においてどんなコミュニケーション問題を感じているか、意識が明らかになる。

(3) 言語景観について、写真やその他の資料を元に多文字指数を算出し、現代における日本国内外の多文字化、規制問題を明らかにする。

(4) 日本人の日本語能力、理解力テストによって論理力、判断力、表現力がどのレベルにあるかを明らかにして、日本人学生に対する教育の問題点を明らかにする。

## 4. 研究成果

外国人留学生に対する「会話スタイル」アンケートの結果から見えてきたことは、彼らが予想以上にコミュニケーション上の「曖昧性」に悩んでいることである。もちろん、中には曖昧性に心地よさを感じるようになったという者もいるが、それは例外的であって一般にはその困惑状況が浮き彫りになった。これを解決するには二つの方向がある。ひとつは対日本人と対外国人とで会話スタイルを使い分ける日本人側の努力である。つまりより自覚的な言語行動意識と実際の使い分けの知恵をそれぞれがもつことである。またもうひとつはとくに日本語教育や日本事情教育に携わっている人間がより「曖昧性」の本質を理解し、その教育の中でそれを意識的に伝えることである。日本的「曖昧性」は日本文化のひとつであり、日本人一人一人の中に深く根ざしているものであるからそれを変えることは容易でないし、また変える必要もない。要は、使い分けをする配慮と知恵である。

江戸時代から明治時代にかけては、国内でも国外でも漢字が優勢で、かなは多くないし、アルファベットも居留地などを除くと表れない。つまり戦前の植民地の文字景観には均質的な部分があつて、当時の国内と似ていたと言える。一方ハワイや旧満州のように、漢字かな以外の文字を使う地域・時期は、例外的に高い数値で、国内とは違っていた。ただし、21 世紀の日本の一部はこれに近くなっている。なお真珠湾攻撃以降のハワイ日系人は、本土の強制収容所に連れて行かれることは（指導者層を除いては）免れたが、(Speak English という標語があつて) 公共の場で日本語を話さず、看板の日本語も消したという報告もある。ただし、まったく規制がなかったという人もあり、実際日本語の使用についての布告などの資料は目にしていない。手記や自分史などに見られる日本語規制は自己規制、自粛だった可能性もある。またホノルルと地方の「耕地」で事情が違っていたとも考えられる。

少なくとも日米開戦以後の写真で、ハワイ

の日本語表示がほぼ消えたことは、乏しい写真で分かる。戦後の台湾・中国でも同様だったろう。台湾の場合は、話し言葉としては使われていても、街の看板などでは使われなくなったわけで、景観が人々の言語生活をそのまま反映するわけではないことを示す。これは現在の国内のファッション街のアルファベット表示の多さが日本国民の語学能力の高さを物語っていないのと、事情は似ている(変化方向は逆だが)。看板の文字を規制し、先駆けて変えることが可能だが、話しことばの規制は困難である。言語景観は時の理想、将来の方向を示すともとらえる。

言語接触の有無は、文字化言語のばあいは景観に現われる。ことに定住が進んだばあいの移民では、商店名や商品名(輸入品)という広い意味の景観に、接触の状況が反映される。景観に表れた文字には、経済要因が働く以外に、象徴としての多言語使用がある。情的機能により、時には不経済覚悟で、言語選択 language choice、文字選択 character choice が行われる。帰属意識、国民意識の表示が、移住地では意図的に行われる。国内の言語景観の調査により、外国語の使用増加については、ホスト社会の対外意識の変化が影響することが読み取れる。

日本人大学生の理解力の実態が明らかになった。理解力テストは、能力別にいくつかのタイプに分けられる。多言語社会のコミュニケーション摩擦について日本語の「曖昧性」に悩む外国人が多いことがわかった。言語行動において意識と使い分けの実際を理解することが大切である。日本語学習者の情的コミュニケーションの表現能力が、不十分であることが明らかになった。日本語教育でとり扱う教授項目の一つとして位置づける必要がある。

日本語景観の歴史的分析による言語接触、多言語化、多文字化の問題点や規制に関する問題が明らかになった。継続的に研究成果の報告会を開催し、活発な意見交換を行ってきた。大学院生の参加も含め、研究組織以外の外部からの発表者の参加も得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

①山下暁美「日本語学習者の情的コミュニケーションの分析と考察」『応用言語学』No.13 (査読有) 明海大学大学院応用言語学研究 2011.3. pp.119-127

②山下暁美「発話の韻律的特徴と印象の関係—あいづちと「ね」の分析を中心に—」『日本語教師連絡会議論集』(査読無)2011 pp.125-130

③山下暁美「好感度とコミュニケーションスキル—日本語学習者の談話分析による—」『応用言語学』No.12 (査読有) 明海大学大学院応用言語学研究科 2010.3. pp.139-150

④山下暁美「外国人集住都市の言語景観—言語表示サービスの現状—」『明海大学外国語学部論集』第 22 集 (査読無) 2010.3. pp.17-34

⑤Yamashita, Akemi "Native and Foreign Communication Standards in Colloquial Japanese-Brazilian Communication-" *Dialectologia Revista Electronica* N0.3 (査読有)

<http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia3/> 2009 pp.107-121

⑥Yamashita, Akemi Japanese language education to facilitate multicultural living -An example of a Nikkei-Brazilian Japanese speaker- *Selected Research Papers in Applied Linguistics No11*(査読有) Graduate School of Applied Linguistics Meikai University 2009.3 pp.133-143

⑦山下暁美「共生時代の日本語教育-日系ブラジル人を例に-」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.21 (査読無) 2009.3 pp.61-67

⑧Yamashita, Akemi NATIVE AND FOREIGN COMMUNICATION STANDARDS IN COLLOQUIAL JAPANESE LANGUAGEAN -EXAMPLE OF JAPANESE-BRAZILIAN COMMUNICATION(査読有)

*Dialectologia Revista Electronica* N0.3 <http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia3/> 2009.6 pp.109-123

⑨井上史雄「「お」の使い分けに見る美化語の循環過程」『日本語の研究』6-4 巻 (査読有) 2010 pp. 63-78

⑩Inoue, Fumio "Real and Apparent Time Clues to the Speed of Dialect Diffusion" *Dialectologia* 5(査読有) 2010 pp.45-64

⑪Inoue, Fumio Standardization and de-standardization processes in spoken Japanese *Language Life in Japan* 1 (査読有) 2010 pp.109-123

⑫井上史雄「経済財としての言語」『応用言語学研究』11 (査読有) 2009. 3. pp.95-102

⑬陣内正敬「多言語社会のコミュニケーション摩擦-曖昧性-という課題」『日本語学』(査読有) 明治書院 2010. 11. pp.98-117

⑭備前徹

題名: 日本人大学生の能力タイプ  
雑誌名: 多言語社会の日本語教育に関する社会言語学的総合研究

(平成 20 年度□22 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究(C)研究成果報告書(課題番号 20520476)) 2011 年 1 月 (査読有)

〔学会発表〕（計 3 件）

①山下暁美「情的コミュニケーション教育の必要性について-日本語学習者の談話分析による-」日本語教育連絡会議 2010.8.21 チェコ

②山下暁美「共生社会に必要な日本語表現能力について-日系ブラジル人を例に-」国立民族学博物館主催「日本における移民言語の基礎的研究」共同研究会（招待発表）2009.3 国立民族学博物館

③Yamashita, Akemi “The Linguistic Landscape of the new born Nikkei-Brazilian town in Japan” The Siena Linguistic Landscape Workshop 2009.1 Siena

〔図書〕（計 1 件）

『多言語社会の日本語教育に関する社会言語学的総合研究』（編著）平成 20 年度～平成 22 年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）課題番号 20520476（研究代表者山下暁美）研究成果報告書 2011 年 1 月 74ps.

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

山下暁美 (YAMASHITA AKEMI)  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：10245029

(2)研究分担者

井上史雄 (INOUE FIMIO)  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：40011332

(3)連携研究者

陣内正敬 (JINNOUCHI MASATAKA)  
関西学院大学・総合政策学部・教授  
研究者番号：70154424

備前徹 (BIZEN TOORU)

専修大学・文学部・教授  
研究者番号：30208897